



NIPPON BEARING

2月21日付 日本経済新聞広告 『かくれ雑学』詳細

【大相撲 一場所で使う塩の量は 約 700 k g】

日本の国技である相撲。その歴史ははるか昔に遡ります。

相撲の起源は、五穀豊穡を願うお祭りの中で、豊作を占って力自慢をしたことが始まりでした。平安時代になると『相撲節会（すまいのせちえ）』という年中行事として、さまざまな儀式や決まりごとが定められていきます。

この決まりごとを一つ一つ見ていくと、相撲が単なるスポーツでは無く神様に捧げる儀式であり、日本文化そのものであることが実感できます。

土俵は神聖な場所で、赤（朱雀神）・青（青龍神）・黒（玄武神）・白（白虎神）の神様たちが四隅に鎮座し、他にも相撲の神様と言われる野見宿祢神や勝利の神々に見守られた空間です。

土俵に上がった力士は、まず最初に『四股（しこ）』を踏み、邪悪なものを封じ込めます。

次に『力水（ちからみず）』と『力紙（ちからがみ）』。これらは体を清める意味があります。

そしていよいよ、『塩まき』です。土俵の邪気を払い清め、怪我をしないように神様に祈る意味があります。

十両以上の力士だけが行うことができ、1日約40～50kgの塩が使用されます。

初日から千秋楽の15日間で600～700kgもの塩がまかれています。随分多い量ですね！

ところで、転がりを利用したベアリング製品には、ボールや転動体が使用されています。

外からは見えないその数、どれくらいだと思いますか？

日本ベアリングのスライドブッシュでは型番にもよりますが、多いものでは何と！300個以上のボールが使用されています。

土俵にまかれた塩同様、見えないところで使われる数多くのボールによって、ベアリングの動きが支えられているのですね。

様々な儀式を行いながら日本文化を継承していく相撲。

直動ベアリングの正確で規律正しい動きは、相撲の精神性に共通する点を感じます。

【企画・協力：㈱学研エデュケーショナル】